

自然現象の影響を考える

『黄帝内経』には、次のように書かれている。「人は四季の作用を受けて活動している。ゆえに自然界の変化にしたがって生きることが大切である」(『素問』四気調神大論 **原文**)。生体は自然の中で生きており、寒さ・暑さ・湿気・乾燥などの自然現象の影響を受ける存在であることは、日常的によく経験しよう。この事実に着目し、東洋医学では、寒さ熱さ・湿気などの自然現象を疾患の原因としたり、悪化・誘発要因としたり、また疾病の病態表現として利用してきた。自然とは人に大きな影響を与える存在だと考え、自然現象を病因・病態理論のなかに取り入れてきたのである。このように自然の影響を重視し医学理論を構築してきたところが、一つの特徴となる。具体的には次の2つである。

自然現象は病因や悪化要因となる：先の『黄帝内経』の条文のように、自然現象に対応してこそ健康が維持され、うまく対応できないと、疾病の病因や悪化・誘発要因となる。

たとえば冬季の感冒は寒さが、熱中症は夏季の暑さがそれぞれ生体を襲ったために発病したもの、つまり寒さや熱さを病因と考えるわけである。また雨で古傷が痛むといった表現のように、雨天時に頭や関節、傷口などが痛むことから、雨天が疾病の病因や悪化要因となると考えていく(発病の詳細は病気の起こり方〈27頁〉を参照)。

病態の説明に自然現象を利用する(図1-4)：疾病とは生体内の不正常的な変化である。自然もまたさまざまに変化している。東洋医学では疾病のある変化つまり一部の病態を、自然現象の言葉を借りて表現している。熱い・寒い・乾燥・湿気などである。これは、生体内では自然の変化と同様の変化が起こるという東洋思想の考え方にもとづく。つまり生体を含め万物の変化の原理原則は同じであり、そのために同じ言葉で表現することが可能だという考え方である。これを端的に表した言葉が、人体は小宇宙という言葉である。

図1-4 自然現象を病態表現に利用する

万物（自然現象など）と生体の動きの原理原則は同じ

↓
同じ言葉で疾病状態を表現することが可能

↓
生体の病態の説明に自然現象を利用

	〔代表方剤〕
熱証—生体内が熱い病態	…黄連解毒湯
寒証—生体内が寒い病態	…当帰逆加呉茱萸生姜湯
痰飲—水が流れず停滞した病態	…五苓散
燥証—乾燥した病態	…麦門冬湯（肺）
風証—体表や体内に風が吹いて いるような病態	…釣藤散
* 症状：痙攣・震顫・めまい・痒痒感など	

具体例をあげてみよう。夏季と同様に、生体内が熱くなったと考える状態を熱証という。体が熱く感じる、冷たい刺激で気持ちがよい、熱さで悪化するなどの症状がみられる。逆に冬季のように体が冷えた状態を寒証という。冷たく感じる、寒さで悪化し温めると緩和するなどがその症状となる。逆にいえば、これらの症状がみられる状態を寒証や熱証とよぶ。

また水が流れず停滞した状態を痰飲^{たんいん}とよび、水分の停滞を連想させる症状がみられる。浮腫・濡れ雑巾のように体が重くなる・鼻汁・肺からの痰などである。

少し理解しづらいものに風証がある。症状としては痙攣や震顫、めまいなどが現れるが、これらの症状が風に吹かれたようなところからの類推である。その他に皮膚乾燥症のように、生体内が乾燥した状態を燥証という。